

二十一世紀と『法華経』の光彩

栗原淑江 訳

ロケツシュ・チャンドラ

一九三六年、九歳の私は日本についてわくわくする思いを抱いておりました。当時、日本は「日出ずる国 (the Land of Rising Sun)」でした。私が聖なる日本の大地に足を踏み入れたのは、一九七〇年代、人生の真っ盛りの四十代の時のことです。その頃、日本は「高騰する円の国 (the Land of Rising Yen)」になっていました。そして今、熟年になってふたたび、池田先生のご配慮により私は日本を訪れています。先生の多大なるご尽力により、日本は国境を超えゆく生命と精神の潮流の中で、「精神が向上する国 (the Land of Rising Mind)」になって

ゆくことでありましょう。

池田先生は、釈尊がヴァイシャリー郊外にある竹林精舎で最後の雨期をすごした時の話を紹介されたことがあります。——「釈尊は語った。『この世は美しい。この世に生きるとは喜びである』と」。何と活力に満ちあふれた人生の境地でしょう。ここには、私たち人間が存在することの意味を深め、生きる範囲を拡大し、可能性を高めゆく境地在示されています。

日本語との出会い

私と日本文化との最初の出会いは、「アイウエオ・カキクケコ」というカタカナの五十音図でした。これらの文字の並び方は、サンスクリット語ととても似通っているのです⁽¹⁾。すぐさまひらめいたことは、インドの人々と日本人々は、「ダルマ (法)」の上で親戚関係にあるということです。カタカナの文字は仏教と関連しているのです。

すると父は、カールグレン (Karl Gren) の著書、『中国語における音韻と記号』をもつてきてくれました。この本は、象形文字から表意文字に至る漢字の成り立ちを解説したものです。

それ以来、私は、毛筆で書かれた漢字の炎のようなエネルギー (筆勢) に魅了されています。漢字の表意文字の世界には、一文字に何十画もの筆遣いがあり、決まった筆順があり、全体的な有機的な美があります。それは、修養、丹念な仕事、細密画の手法といったことを感じさせます。漢字は、仏教の僧侶、経典、仏像とともに日本に伝来しました。経典は漢字で書かれていたので、漢字は、もつとも深い次元でインドと日本を結びつけるのです。漢字の四角い文字は、あたかも女神の素足が触れるのを待つ苔のじゅうたんの上に置かれた、四角い石のようです。

当時、私の父ラグ・ヴィラ教授のもとで、日本政府から派遣された二人の留学生がサンスクリット語を学んでいました。父は、そのうちの一人、山本智教氏のもとで私に日本語を学ばせたいと考えました。山本氏は十二冊の『小学国語読本 (Shogaku-kokugo-tokuhon)』[当時の日本の小学校で用いられていた国定国語教科書]を入手しました。私には、この書名の漢字はとても不思議なものに思えました。私は、頬杖をつきながら父にたずねたものです。「漢字って何なの? 書名には「K」の音が四つあるのに、どこにも「K」の文字が見あたらないよ」と。

『小学国語読本』は「サイタ サイタ サクラガ サイタ」で始まっていました。そこには、仏教的な環境の中に生きる日本人にはなじみの深い、無常 (anityata) の思想が深くしみ込んでいました。大空には雲があり、壺

の中には水がある。無常の思想は、畏敬の念や慈悲の心といった、さまざまな崇高な感情を活性化するものである。

『小学国語読本』は、簡潔にして優美であり、池に映る月影のように静寂さをたたえていました。漢字は本来、「静かな雄弁」をともなう簡素さという魅力をもっています。数十年後に白い砂と岩の置かれた竜安寺の「枯山水」の庭園を見た時、私は、この読本を思い出しました。目をみはるような簡素さの美学は、自然が織りなすものに注ぐ日本人の愛を受け継ぐものなのです。

ガンジーと『法華経』

一九三〇年代半ばに、「南無妙法蓮華経」はマハトマ・ガンジーのアシユラム（宗教的教育・訓練を受ける修行の場）での祈りの言葉に加えられました。『法華経』は、マハトマ・ガンジーの心を内省へと駆り立てました。ガンジーは、父に『法華経』についてたずね、漢字の経典とサンスクリット語の原典を求めました。父はガンジーに、南条文雄氏とケルン氏が校訂したサンスクリ

ット語の『法華経』の一冊を贈呈しました。また父はガンジーに、クマラジーヴァ（鳩摩羅什）の生涯と思想について、また日本人の心に『法華経』を開き示した日蓮の生涯と思想について語ったのです。ガンジーは、ガンダーラなどのかつての仏教の聖地を見せるために、父のもとに日本人の僧侶を派遣してきました。

それ以来ずっと、『法華経』は、私が精神の家に至るための小道、「露地（路地）」の踏み石であります。

「露地とは小道

浮世の外にある小道

心にまとう俗塵は

そこで舞い散ることはない

『法華経』において、「露地」とはさとりの世界であり、精神の基盤であり、無我の世界です。そこでは、人々は世俗の雑事から解放されるのです。池田先生は、世俗の塵を取り去るためにここにいらっしゃいます。グローバルな「待合」の中で静寂は深まります。その静けさの中に、私たちは未来の簡素な荘厳さを求めます。形あるものが形あるものを生み出すのではなく、形なきも

のよって形あるものが生み出されるのです。池田先生は、優雅で穏やかで静寂な『法華経』の「さび」を、私たちにもたらししてくださいませ。

「蓮華の開花」の意義

子ども時代に、簡素さの深みや自然な非対称性の美をもつ漢字に驚きを感じたことから始まった私の旅は、蓮華の開花において極点に達しました。蓮華の開花は、実質的な「ヒューマニズムの覚醒」を象徴するものです。

それは、池田先生の「真如 (Tathata) [ありのままの姿。普遍的な真理]」が具えている、誠実さと絶妙さを象徴しています。私たちは、ぼんやりと、未来に花々が咲くことを考えたり、春にかえでの葉が萌え出ることを考えたりしますが、池田先生は、私たちの心の蓮華が泥水の中から生じる不思議、神秘を明らかにしてくださいませるのです。

水中から生じる蓮華は、生死の大地あるいは生死そのものを表します。蓮華の意味をさとした人は、けっして揺るぎません。宇宙的に見れば、蓮華は水面に映る天の

光である昇りゆく旭日に呼应して花開きます。このことは、日本の皇室が「天照大神」を起源とするという神話や、中国の「天子」の概念を思い起こさせます。

私の父ラダ・ヴィラ教授は、京都の長光寺所蔵の「観無量寿経」の「十六観」を描いた美しい掛け軸の複製を持っていました。一番上に大きな赤い太陽が描かれ、一番下には「三有海 (Dhavasāgara 輪廻の海)」が描かれていました。これらは天と地を表しています。この世（此岸）とあの世（彼岸）は一对のものです。そして、太陽は天の光なのです。

こうした象徴の仕方はヴェーダ時代にさかのぼります。ヴェーダのテキストの一つ、『パンチャヴィンシヤ・ブラーフマナ (Pancavimsa-brahmana)』には、大地である蓮華は、降り注ぐ天の光によって生じるとあります。このような様相は、日蓮の名前に鮮やかに示されています。このような様相は、日蓮の名前に鮮やかに示されています。日蓮は、「地上の純粋な心（蓮）」を照らす「神聖な光（日）」であります。日蓮こそ生死の泥沼の中に生い立つ蓮華であり、俗世の中に生きながらもそれに染まらない賢人（菩薩）なのです。

蓮華は愛され、称えられています。蓮華眼〔青蓮華のような眼。仏の眼をさす〕、蓮華のような足〔釈尊など聖人の足の裏には蓮華の模様があるとされる〕、蓮華の玉座〔蓮座。蓮華台・蓮台ともいう。仏・菩薩の座する蓮華の台座〕、蓮華の姿勢〔蓮華坐。結跏趺座、すなわち座る姿勢で、両方の足を股の上へのせ、足の裏を上に向けた座り方〕などの言葉があります。蓮華は、この世の内にありながら、この世を超越した確固たる存在であることを表します。すなわち、俗世にありながらそれに侵されないということでもあります。『法華経』は静寂であり、それを背景に真金の人である池田先生の輝きはいやましておられます。先生は、あまねく幾通りもの役割を果たされながら、人々に進むべき「道」を示してくださいっているのです。

中世インドの古典主義的な詩人の言葉の中に、「心の夢の中に咲く蓮華は、何とみごとなことか」とあります。蓮華とは、その中に真理が示される現象であるとともに、その上に真理が示される現象でもあります。また、心の蓮華とは、存在を支える「空」を主体的にとらえたものです。そして、「創価」つまり価値創造とは、

青蓮華と赤蓮華の上に位置するのが、白蓮華です。『法華経』のサンスクリット語の原典の題名は、『白蓮華の経典』あるいは『サダルマ・プンダリーカ・スートラ (Saddharma-pundarika-sūtra)』です。白は清浄さ、人間の清浄な状態、世界の聖なる価値を表します。

蓮華は、「他土〔浄土。苦悩に満ちた娑婆世界とは違って、仏のさとの理想が実現した清浄な世界〕」に向かって開き、「彼岸」、「波羅蜜 (paramita)〔さとの修行の完成〕」の精髓を体現しているのです。それは、思想、構成的な知性〔分別智。概念作用の加わった認識〕、心の不安定さを超越した聖なる境地です。思考作用を停止した時に、「理想世界への道」に入ることができます。意識を超えた深みにある、清純で水晶のように透明な、輝く境涯への跳躍なのです。

蓮華は泥の中から生い立ちますが、それでもなお汚されることはありません。蓮華は永遠に清浄であり、現象界に浸透してもなお清浄なのです。慈悲の水から生い立つ蓮華は、人々が本来もつ自分らしい自分である「蓮華

目に見えないエネルギーであります。また、生命の本質の天空であり、けっして視界から消え去ることはありません。生きとし生けるものすべての覚醒であり、すべてのダルマの覚醒なのです。アシュヴァゴーシャ(馬鳴)は、「花々とは道徳的な所作である」と述べています。蓮華の上にこそ、覚者としての釈尊は端座するのです。『法華経』では、青蓮 (nipata)、赤蓮 (padma)、白蓮 (pundarika) について述べられています。クマラジーヴァの漢訳『妙法蓮華経』では、「青蓮華香」、「赤蓮華香」、「白蓮華香」と訳されています。

青蓮華は「禪定 (dhyana)」の理想を表します。それは、本来、大空のように光り輝くものです。内なる光は空の青色になぞらえられます。また、美しく深い青磁の色には、禪定の内省の諸段階が反映されています。実は、青磁を作るすばらしい技術は、仏教者の禪定の教団の中で生まれたのです。古代の仏教寺院は、青いタイルで作られていました。

赤蓮華は、無我の境地への精神の集中を示し、また、行動のエネルギーにあふれた献身的な生き方を示しています。の心」の境涯を得たことを象徴するものです。「蓮華智」は、自ら輝き、どこにでも偏在することを直観的に知覚することです。それは、神秘的な空間 (space) の中心、すなわち心の深層に現れる彼岸を象徴するものであり、そこでは、つねに新たな精神の領域が生じるのです。

蓮華の中には、つまり秘められた心の奥底には、不思議な聖なるものが存在しています。蓮華とは、その中に現象的なものが溶け去るような、清浄で透明な「空」です。人は、「空」を体験すべく蓮華の座に座り、人間本来の神聖なる存在、すなわち「仏性」を顕現するので、青蓮華の花びらの形をした仏眼は、つねに静けさをたたえています。ブツダは、人間と見なされる時には、その完全性によって世界の精神的統治者として選ばれたものであり、統治者の象徴である獅子の座に座します。宇宙的存在という、より高いレベルで考えるならば、ブツダは森羅万象の精髓である「空」の象徴であり、つねに蓮華の座に座るのです。

日本における『法華経』

『法華経』は、日本の歴史を通してずっと、灯台の光でありました。聖徳太子（五七四―六二二年）は、日本初の著作家であり、『三経義疏』の一つとして『法華経』の注釈をしたといわれています（『法華経義疏』）。他の二つは『勝鬘経』と『維摩経』の注釈です。太子の手になるものは今でも現存しているといわれます。⁽⁷⁾太子は、日本を大国にするという壮大な構想をもって、『法華経』にエネルギーを注いだ最初の日本人だったのです。また、七四〇年代には国分尼寺が建立されましたが、これは、女性も成仏できるという『法華経』の教えに基づくものでした。⁽⁸⁾

平等主義の理念は、『法華経』にとって不可欠かつ重要なものです。ヴァスバンドウ（世親）は、平等な真理、平等な社会、平等な存在についての教えが『法華経』で展開されていることを明らかにしました。『大般涅槃経』には、生きとし生けるものすべてが仏性を持つと説かれています。この考え方は『法華経』に由来す

るものです。こうした統合的な真理により、この経典は広く流布することになりました。

池田先生は、次のように述べられています。「蓮華は美しい花を咲かせていても、その根は泥中にある。同じく、真実の妙法の行者は、日常社会の混乱と喧騒の真只中で、庶民と苦楽を分かち合いながら、『法華経』の真実の精神を自らの生活で実証しながら、生き働くのです」と。

日本は「日出ずる国」です。アシユヴァゴーシャ（馬鳴）は、釈尊伝『ブツダチャリタ（仏所行讃）⁽⁹⁾』の中で、ブツダは「日種（太陽の末裔）」である「甘蔗族（Kṣuvaku family）」の子孫であったと述べています。現代において、日本（日）と蓮華（蓮）は、今世紀に『法華経』を花開かせた太陽である池田先生という人物のうちに統合されています。

「衆罪霜露の如し

慧日能く消除す」（『普賢経』）

地涌の仏子である池田先生は、深く内なる輝きを発しながら、太陽のように遠くはるかな旅をつづけてこられ

ました。ブツダもまた、永遠の放浪をつづけており、常に動きつづけています。つねに歩みを止めないということとは、さとりを求めつづけることです。ヴェーダの讃歌は、「インドラは放浪者の友である」と述べています。そして、

「旅するものは蜜を見つけ、

美味なる優曇華の果実を見つける。

太陽を思え。

永遠に旅するものこそ幸福である」と。

池田先生は旅人です。旅をされながら、私たちの荘厳な明日の夢を呼び起こしつづけてくださっているのです。

芸術と『法華経』

池田先生は多くのすぐれた特性をそなえていらっしやいます。すばらしい芸術家でもあります。先生の写真集『自然との対話』は、私たちと形あるものの根源との間にかかっているヴェールを取り去ってくれます。そこでは、形あるものは本質へと立ち戻り、アイコン（図像）

は見えざる原型に立ち戻り、形あるもの（Eidos）は形を超えたもの（Arche）非色へと立ち戻るのです。先生の写真は生命の本質を象徴的にとらえたものです。

ゲーテが「イタリアの」パレルモの植物園を歩き回っていた時、彼の想像力のスクリーンに生き生きした象徴が現れました。ゲーテは語っています。

「目を閉じ、頭を傾けて、視界器官のまさに中心に

花を思い浮かべた時、色づいた花卉と緑の葉をも

つ新しい花々が、この心に開花した。この花々は

本当の花ではなく、夢の花であった」と。

花々に生命を与える力のヴェールが取り除かれたのです。

池田先生の写真は、自然を魅惑的に映し出す映像です。それらは、厳密な決断力で決定的瞬間をとらえたものです。それらの写真は、情報や通信のためのものではなく、存在のクレバス（裂け目）にかいま見られる希望の光です。被写体の神聖さを引き出し、美的でない物質的なゆがみや、損なわれた美しさを元の美に立ち返らせるのです。また、禁欲的なまでに簡素さを呼びましま

す。それは、美的なものに対する真剣な取り組みのなせるわざです。牧草地、花畑、自然を写した先生の写真は、一切のゆがんだ思考や感情をはぎとったものであり、まさにニルヴァーナ (Nirvana 涅槃)、つまり完全なる自然なのです。

先生の写真を見ていて思い起こされるのは、「手つかずの原石の塊」です。中国人画家、チイ・パイ・シー (Chi Pai-shih) の絵画に見られるような、分化していない連続性が思い浮かぶのです。チャン・チュン・エン (Chang Chung-yuan) は、この画家について、『道教と創造性』(ニューヨーク、一九六三年)の中で次のように述べています。

「簡素で大胆な筆さばき——この絵画には、客観的な美も主観的な観念もないが、手つかずの原石の塊のような質感が備わっている」と。

抑制された無我が美を高めたのです。京都のある寺院を訪れた時、その僧侶が、「石は石以上に美しくならなくとも、そのまま十分に美しい」と語っていました。生き生きと躍動する詩は、個々の朽

ち果てゆくものを超えているのです。詩人はうたいます。

「原子の心臓を開いて見るならば
そこには太陽があるだろう」

池田先生の生命は、行動をとともなう観想の庭園であり、普遍的なレベルに達しておられます。「行動なき智慧は、果実ならざる樹木のごとし」ということわざがあります。知識人のインクと殉教者の流す血は、ともに向上の旅の途上にあります。誰も皆、人間を環境として、その中で生きています。行動と観想は、相伴って、調和ある責任を果たさなければなりません。カシュミールの著名な宗教詩人、ラッレシュヴァリー (Lalleshvari) がいうように、「外部から、汝自身の最も内なる部分に」入らなければなりません。

「能」に見られる「無」の特質は、日本庭園に見られる名状しがたいほどみごとな踏み石のように、簡素でもかもし趣深いものであり、新世紀への踏み石となることのできるものです。

池田先生は、『法華経』のもつ豊かで情熱的な遺産を
でしようか。生命に息吹を与えつづけるために、義務感で行っていることを愛から発する行いに変えることのできるでしようか。

『リグ・ヴェーダ』(一・二六四・三七)には、「思考に迷い、我さまよう」とあります。永遠に彷徨しながら、つねに合理性を更新していくことは、思想、思考、哲学、科学に人間味を与える上で欠くべからざるものです。物事はそれ自体で成り立っているなどという単純な考え方を捨てて、人はつねに物事を解釈しなければなりません。クモの巣のような概念構造の網の上でこそ、物事は物事たりうるのです。いかなる物事、いかなる現実の意味も明らかではありません。そのたびに新たな解釈を加える時が、解放の始まりなのです。

そうした普遍的な原理や普遍的な人間は、人間たること以外のすべてを人間に保証しています。人間の運命や偉大さが多様なものであると気づいた時、人生に新たな幅と奥行きが開かれます。物事には尽きせぬ面があるということが、『法華経』の奥深い魅力の一つなのです。人間の文化は、つねに進歩する自己解放でなくてはなり

受け継がれ、私たちを一つとなった世界に参加させることによつて、高邁な「完全なる意識」へといざなってくれるださいます。先生は、薬師如来のように、世界各地で人々の生活に関わり、人間を取り巻く環境という根本的な土壌に依りて、大いなる「癒し」の可能性を示されているのです。

知識は、文化全体が受け入れることができるような神話の段階にまで高められることが可能でしようか。私たちは自らの内面に目を向け、まだ未踏の知られざる領域を見つけていくことができるでしようか。また、他の人々と共通する基本的な核を、自らの内に見出すことができるでしようか。

およそ四千年前の古代インドの森でのことでした。一人の子どもが優曇華 (udumbara いちじくの一) の実を割っています。子どものやわらかな指でも簡単にできることとです。その子は、その種の中に何も無いことに気づき、どうして「無」からこの森全体が生まれたのかと不思議に思いました。

私たちは、心は心臓にあるのだと定めることができる

ません。たとえ大きな差異や深い対立があつたとしても、それらは不和や仲が悪いということとは異なるのです。互いに相手があつて完全なものとなり、補完するものなのです。各々が新たな地平を開くのです。

人間は物質的な宇宙に住し、象徴的な宇宙で開花するものです。言語、神話、芸術、宗教は、この宇宙の一部であります。各々が、象徴的な網、人間の経験というもつれた網をつむぎ出しているのです。科学の抽象概念だけでは現実をきわめ尽くすことは不可能です。森羅万象は時々刻々と変化しており、そこにこそ芸術の領域があるのです。

池田先生は富士美術館を創設されました。それは、永遠に流転する人間の、自分自身との対話です。プラトンは、自らの目で見ることと語られることの違いを説明しています。彼の手法は、個人が自分の目で見るといふものでした。富士美術館は、自分の目で見える場であり、世界と人間についての目を見る「幾何学」⁽¹⁰⁾なのです。

『法華経』と新時代

池田先生は、はるか遠くまで精神の長途の旅に出られ、ご自身へと帰つてこられたオデュッセウス⁽¹¹⁾です。また、いにしへの「山伏」になぞらえていえば、先生は世界と出会つてきた「世界伏」⁽¹²⁾です。そして、道なき道を求めて旅をされる先生は、「エク・スタシス」、すなわち凡人から傑出した「外に立つもの」です。先生は、総体性に至る道を探求しておられます。そんな先生にとつては、地球全体が故郷なのです。

『礼記』では、人間を「身体の王子」すなわち心に譬えて、「人間は天と地の心である」と記しています。人間は、天と地の間で均衡を保っているのです。宇宙を適切に機能させるためには、人間が宇宙の秩序に深く則つたやり方で介在しなければなりません。人間と宇宙は交流しあわなければなりません。天のわざを行う人間は、多面的なものに自らを開く必要があります。池田先生が、自らの文化の中で生きながらも、自由に、多元的に、「無所有」(煩惱の範囲を乗り越えていること)の喜び

によつて、人間の生の総体性を調和させようとしていらつしやるように。

とどまることのない潮流のような先生の教えは、全世界の人類を益する全空間を包みこんだビジョンです。そして、先生のお姿はダイナミックにそこかしこに登場されます。ヴィマールキルティ(維摩詰)のように、あの手この手で聴衆たちを魅了し人々の智慧を深めておられます。

先生のビジョンは、エゴの牢獄から自由の身となつた、何ともいえない爽快な気持ちに世に知らせるものです。

「見えざるものを見たなら

あなたの心は本来の自由を取り戻す

——「法身 (dharmakaya)」である!

馬から降り、風を背に受けよ

その時、騎手も心も、天空を駆け上がるのだ!

池田先生は、灰塵の山のように積もつた曖昧模糊たる無知(無明)を洗い流す智慧の光線を、すべての人に与えようとされています。あるいは、ヨガ行者のエーカヴ

アジュラー (Ekavajra) が述べるように、「大空のごとき『空』という書物に、清浄なさとりと智慧の文字を書きつづれ」というように。

先生は限りある時間の中で生きていらつしやいます。人間の運命をさらに味わい深いものにするために、いつでも時間を超えて飛び立つ準備ができておられます。インドの聖人チャンデーダース (Chandidas) にとつてそうであつたように、池田先生にとつても、「人間はすべての上に立つ。人間の上には何もありません。先生は月明かりのように、一番貧しい家々にも光を降り注ぎます。そして、万人の胸中に汚れなき仏種・仏性の純粹を呼び起こされます。チベット語の経典の偈頌には、心を蓮華に、内なるさとりを中心にある花粉に譬えたものがあります。

「何とすばらしい!

蓮華の花粉が

心の真中で目をさます

このあざやかな花は

泥には染まらないのだ」

先生の言葉は、ブツダがアーナンダ（阿難）に与えた

臨終の言葉——「自身の灯明たれ」——と響きあいます。また、『スッタニパータ』の、「自身の徳をもって灯明とせよ」との言葉とも響きあいます。自身の最も深い部分を己れの生の現実としなさい。宇宙との調和を保ちながら、清浄なるさとりを得た揺るぎない心こそ、真の实在、すなわち「法身」なのです。

私たちは彼岸への旅人です。「無常」を超え、「空」を超え、「輪廻」を超えて、愛 (maññā)、「同苦 (karuṇā) 悲」、智慧 (brahṇā) の世界へと渡るのです。この三つは、アルチ僧院の三階建ての寺院に、弥勒菩薩 (慈)、観音菩薩 (悲)、文殊師利菩薩 (智慧) の巨大な像として祀られています。

池田先生とともに、地上のあらゆる知性と良識の人が蓮華と開花しつつあり、私たちを取り巻く世界そのものが歓喜の池となりつつあります。その歓喜は、現象世界を超えた存在の至上の喜びなのです。

訳注

(1) 日本の五十音図の起源については諸説があるが、サンクリット語の文法学である悉曇学の音声表に基づいて作成されたとする説がある。五十音図は悉曇の母音、子音の順に示唆を得て整理されたという事実が明らかになっている。

(2) 茶道においては、茶室（座敷）に至る通路が露地（路地）とよばれる。茶道の作法では、庭から座敷にあがるのが正式とされる。露地といっても庭園としての広がりを持つものが多いが、それでも露地といわれるのは、それが茶の湯の世界と日常世界を隔離する結果の役割を果たしているからである。千利久は露地を「浮世ノ外ノ道」と考えていたという。

(3) 茶道の露地における施設の一つ。腰掛、袴付、寄付ともいう。形式や位置に特別の決まりはない。茶室に縁が付いていたころには縁が腰掛の役割を果たし、座敷の一室が待合にあてられたこともあった。利久の頃には、外腰掛、内腰掛が設けられるようになり、客は外腰掛けで連れの客と待ち合わせ、内腰掛けでは席入りの合図を待つという。

(4) 中国では、天子が天帝の息子として、天帝に変わって全世界を統治するといわれる。天子だけが天を祭る権利と義務をもつのである。こうした観念は、王朝支配の基礎理念として、清朝末まで保持されていた。

(5) 阿弥陀仏の浄土に生まれるための十六の観法で、『観仏・女人成仏を説く』『法華経』に依拠したものであり、尼僧自身の罪を滅するための寺であるとする。それに対し、ここでの「罪」は「国の罪」であり、滅罪も護国も鎮護国家を示す表現であり、この滅罪は「女性（尼）が国の罪——犯罪、病氣、凶作、天変地異、死者等々——を滅ぼす」と考えるべきではないかとするものもある。

(9) 『ブツダチャリタ』では、二十八章にわたって、釈尊の誕生からその死と、遺骨の分配にいたる全生涯が描かれている。著者のアシュヴァゴーシヤは詩人であり、本書は讚仏文学であるため、経蔵や律蔵にみられる伝とは性格が異なる。しかし、本書は経蔵や律蔵の伝承を逸脱しておらず、伝資料としても大きな価値をもっている。最近の邦訳としては、梶山雄一他編『原始仏典』第十巻、ブツダチャリタ、講談社、一九八五年、などがある。

(10) プラトンには、幾何学の証明の方法や論理について深く省察し、定義、公準、公理の思想を展開させた。彼が幾何学を哲学の準備の学問として重視したことは、彼が創設した学園アカデメイアの入口に、「幾何学を知らざるものは入るを許さず」と大書したという伝説によつて知られている。

(11) 古代ギリシアの詩人ホメロス作の大叙事詩『オデュッセイア』の主人公である英雄。オデュッセウスは、トロイを陥落した後（トロイでの活躍ぶりは『イーリア

無量寿経』で説かれている。十六観法、十六観門、十六妙観ともいう。日想観、水想観、地想観、樹想観（宝樹観）、八功德水想観（宝池観）、楼想観（宝楼観）、華座想観、像想観、遍観一切色身想観（真身観）、観音観、勢至観、普観想観、雜想観、上輩観、中輩観、下輩観。

(6) 蓮華智とは、密教における五智（法界体性智・大円鏡智・平等性智・妙観察智・成所作智）のうちの、妙観察智をいう。五智を五仏に配する場合に、妙観察智は阿弥陀仏（蓮華部の尊）に相当するからである。

(7) 『法華経義疏』については、太子自筆の草稿本といわれるものが存在する。しかし、三経義疏が太子の真撰か偽撰かについては諸説があり、断定的な結論はまだ下されていない。『日本書紀』には、太子が『勝鬘経』や『法華経』の講義を行ったとあるが、義疏撰述についての記事は見当たらない。

(8) 聖武天皇は天平十三（七四一）年に国分寺建立の勅を出し、各国に僧寺（国分寺）と尼寺（国分尼寺）、平城京近くには根本道場として東大寺を建立することとした。国分僧寺は「金光明四天王護国寺」と名づけられ、各寺二十名の僧が置かれ、『金光明最勝王経』が読誦され、鎮護国家が念じられた。他方、国分尼寺は「法華滅罪之寺」と名づけられ、各寺十名の尼僧が置かれ、尼僧が『妙法蓮華経』を読誦した。『法華滅罪』の意味については諸説がある。一つには竜女成

ス』に描かれる)、流浪しながら十二の冒険と危機に出会い、それらを克服する。そして十年後に妻子の待つ故郷にたどりつくのである。

(12) 山伏とは、修験道における修行者、宗教的指導者である。山岳で修行することによって超自然的な力を体得し、その力を用いて宗教的な活動を行う。山野に「伏して」修行することから、山伏と呼ばれる。ここでは、山野ではなく「世界」を駆けめぐるSGI会長を、山伏をもじって「世界伏」と呼んだのである。

(ロケッシュ・チャンドラ／インド文化国際アカデミー理事長)

(訳・くりはらとしえ／東洋哲学研究所研究員)

(本稿は一九九八年十一月三十日に行われた、当研究所主催の公開講演会における講演内容である。なお、読者の便宜のために、説明が必要な箇所については文中に「」で注釈を加え、長くなるものは末尾に訳注として記した。)